

着衣量と環境温度における温熱的快適条件(第1報) 温熱的快適性をう
るための着衣量および環境温度を支配する要因

大阪教育大学 ○奥窪朝子 山口大医・公衛 酒井恒美

目的 本研究は、諸要因の影響を考慮した上で、着衣量と環境温度における温熱的快適条件を追究することにある。本報では、温熱的に快適な条件にある着衣量および環境温度の個人差には、いかなる要因が関与するかを明らかにする。

方法 対象者は学生で、日本人男子、同女子、英国人男子、同女子、熱帯地域からの英国留学生で滞英期間の短い者(8カ月未満)および長い者(20カ月以上、平均3年)各25名、計150名である。日本人学生についての調査は1980年1・2月に京都市において、英国人および英国留学生についての調査は、1979年2・3月に連合王国 Guildford 市において実施した。調査項目は、勉学時選択している個室の温熱条件(環境温度、相対湿度、気流)、主観的温熱感覚値(Bedfordスケール)、着衣量(clo値)、着用衣服が快適なものであることの心理的な条件、皮下脂肪厚などである。データ解析は、数量化理論第1類によった。

結果 温熱的に快適な条件にある着衣のclo値は、他の因子を一定とした上で、①環境温度が高いほど低い、②皮下脂肪厚が大きいほど低い、③着用衣服が快適なものであることの条件をその温かさに求める度合いが強いほど高い、④男と女では差がない。⑤日本人の方が英国人より高い、⑥滞英期間の短い者と長い者では差がない、ことが明らかになった。一方、環境温度は、①着衣のclo値が高いほど低い、②皮下脂肪厚が大きいほど低い、③男と女では差がない、④日本人の方が英国人より高い、⑤滞英期間の短い者と長い者では差がない、ことがわかった。